

海女の語りから見る 自然観・宗教観

海女研究会

2016年12月12日(月)

発表

藤喜一樹(愛知大学 総合郷土研究所)

問題設定

関心の所在

(石原 2014)は、全国の18県に海女がいるが、これほど海女の祭りの盛んな県はないと言う。そして、ほとんどの海女の祭りは彼女ら以外には、知られていないと説明する。

これまでの民俗学、社会学の調査を整理すると、昭和の時代の調査結果では、鳥羽市石鏡の(坂野 1980)の研究、鳥羽市国崎の(野村1978), (安藤 1980), (牧野編 1994) (酒井 2011)の研究があげられる。しかし、これらの研究で示されてきた慣習、伝統行事、社会の制度などの中には、現在、消滅したり縮小したりしたのも少なくない。

昨今の調査では、鳥羽市石鏡、国崎、相差を対象とした(山本 2013)の報告があげられる。しかしこの報告の中で示された伝統行事の中には、現在消滅しているものもある。そのため、伝統行事と密接に関わっている海女の自然観・宗教観が、現在どのような状態にあるのかを見ていきたい。

調査の概要

- ① 現地での聞き取り調査
- ② 調査対象 ⇒ 海女さん10名、元海女さん1名、合計11名
 - ※ 海女さん、鳥羽市内10名
答志Aさん、石鏡Aさん、石鏡Bさん、石鏡Cさん、
国崎Aさん、国崎Bさん、国崎Cさん、相差Aさん、
相差Bさん、相差Cさん、
 - ※ 元海女さん、志摩市内1名
志島Aさん
- ③ 実施期間 2016年9月～11月
- ④ 一人あたりの聞き取り時間、平均2時間



答志⇒

石鏡⇒
国崎⇒

相差⇒

志島⇒

パールロードから石鏡の集落に降りる



石鏡港で魔除けの印を見つける



海女さんの使う乗り合い船



国崎集落内の様子



国崎漁港前の磯



パールロードから相差を眺める



旅館業の盛んな相差と海岸



相差の市場と漁港



体験海女小屋「相差かまど」の海女さん



志摩市志島の集落から急な坂を降り 海岸へ



志島の海岸



対象地域の概要

対象地域	世帯数	人口	男	女	海女	高齢化率
答志町答志	353	1157	532	625	76	33.2%
石鏡町	232	471	215	256	87	46.7%
国崎町	123	328	154	174	60	40.9%
相差町	441	1314	638	676	140	32.4%
志摩市志島	324	776	359	417	17	40.5%

資料 平成28年鳥羽市住民台帳、平成28年志摩市住民台帳より引用
海女数については、平成19年海の博物館調査より引用

海女になった経緯(1)

※ 相差Cさん(2016年現在、42歳)

⇒ 小さい頃は、鳥羽駅周辺で過ごした。相差の人と結婚し、海女のデビューは10年前の32歳の時、近所の人に連れってもらい始めた。

※ 答志Aさん(2016年現在、53歳)

⇒ 小さい頃、磯場がたくさんあり、走って海に飛び込んでいた。結婚後、33歳の時、パートに行きたいとの思いから海女になった。

※ 相差Cさん(2016年現在、64歳)

⇒ 相差で生まれ、相差で育ち、20歳の時に結婚し、21歳で海女になった。子供の頃、親の姿をみてきたことに影響を受けた。

※ 国崎Aさん(2016年現在、65歳)

⇒ 中学卒業後、16歳で海女になり、19歳で結婚するまで、家の家計を助けていた。

海女になった経緯(2)

- ※ 石鏡Aさん(2016年現在、68歳)
⇒ 中学卒業後、県外に海女の出稼ぎに行った。同級生の半数は海女になり、家計のたしにした。
- ※ 相差Bさん(2016年現在、69歳)
⇒ 小学校の同級生の女性60人のうち、約半数が海女になった。中学卒業後、4年間は県外で、観光海女をしていた。
- ※ 国崎Bさん(2016年現在、70歳)
⇒ 19歳で海女になり、家計のたしにしていた。
- ※ 国崎Cさん(2016年現在、72歳)
⇒ 15歳で海女になり、家計のたしにしていた。
- ※ 石鏡Bさん(2016年現在、72歳)
⇒ 結婚まで国崎の実家で家の手伝いをし、食べさせてもらっていた。20歳で結婚し、海女になった。
- ※ 石鏡Cさん(2016年現在、74歳)
⇒ 15歳で海女になり、1年のうち、半年は県外に海女の出稼ぎに行っていた。皆がそれぞれ違うところに出稼ぎ行った。
- ※ 志島Aさん(2016年現在、79歳)
⇒ 志島で生まれ、育ち、小学生の時は海で遊んでいた。20歳で結婚し、23歳の時、海女になった。

小さい頃の体験

《答志Aさん》

⇒ 小学校5年生の時、初めてアワビを獲った。波が高くても、潜り方を覚えていった。泳ぎ方も、潜り方も見よう見まねで覚えた。

《石鏡Bさん》

⇒ 小学校5年生の時、アワビを獲る為に潜った。夏休みはアワビ獲りに夢中になり、籠一杯になり、家族に喜ばれた。

《国崎Aさん》

⇒ 小学校の夏休みは磯へ遊びに行った。子供の遊びは、アワビ獲りしかなかった。誰にも獲り方は教えてもらわなかった。1時間半で、1つか2つ獲った。

《相差Aさん》

⇒ 小学校5、6年生の時、遊びでアワビの貝を海の奥に投げ、泳いで取りにいった。

《志島Aさん》

⇒ 小学生の時、海に遊びに行き泳いだ。そして、堤防から飛び込んだ。海の好きな子と嫌いな子に分かれた。

海女の共同体－海女小屋の存在－

《 石鏡Aさん 》

⇒ 石鏡では、海女小屋は10を越える。海に行く時、出かける合図として、カマドに青峯山の旗をあげる。海女は家族と一緒に、生まれてから知っており、親、兄弟より縁が深い。1つのカマドから1人は、毎朝海を見に行き、カマドは5, 6人から7, 8人が一つのグループになっている。毎年7月10日は、カマドの違いを越え、青峯山へ石鏡の海女さん全員でお参りに行く。

《 相差Bさん 》

⇒ 相差では、現在、海女小屋は48で、海女小屋で食事をいただき、遠慮なしに気を使わず、団らんする。カマドの団らんは娯楽の代わりに、ストレスがたまらない。

《 志島Aさん 》

⇒ 志島では、6月18日、海女さん全員が青峯山にお参りする。青峯山で護摩を炊いてもらう。帰って来て、夜には日待(海女さんの慰労会)があり、お神酒とご馳走をいただく。日待はまわり宿になっており、海女さんが5, 6人ずつ、海女小屋の同志で1つの輪になる。今は海女小屋は2つ。昔は6つあった。海女小屋1つに船を1つ持っている。

国崎の海女小屋と燃料



海女の共同体－青峯山の存在－

鳥羽市松尾町には、海拔336メートルに青峯山正福寺がある。この寺の本尊は、十一面観音である。



海上守護の霊峰として、漁師、海女から信仰。



石鏡、相差、志島では、青峯山の信仰が見られる。



相差では、青峯山のお参りは、順番で家があたる。

船に掲げられた青峯山の旗



海女の危険体験(1)

《 答志Aさん 》

慣れてしていると、油断して塩で流される。



速い塩が底まで行き、塩で流され恐怖を味わった経験。



自分で船までたどりつくのに必死であった。



塩の流れが速い時、下手をすれば命を落とすことがあると自覚。



若い時はできることでも、歳をとるほど体力がなくなり、いざという時に対応できないと認識。

海女の危険体験(2)

《 石鏡Aさん 》

これまで岩の中で手が抜けなくなり、亡くなった海女がいた。



人工呼吸しなければならない海女もいた。



危ないところには行かないという習慣が身についている。



風邪をひいた時は、海で足をつる。体調が悪い時、深いところほど大変だと。海女漁に行ってもあかん時は分かっている。

海女の危険体験(3)

《 石鏡Bさん 》

体の調子が悪い時は、自分でも分かっており、深いところから戻れなく、死ぬこともありうる。



もしもの事があれば、村方に迷惑をかけるし、心臓が悪くなると、亡くなることもありうると自覚し、他人事ではない。

《 石鏡Cさん 》

沖を見ると、風の流れが見え、海の荒さ、風の向きを見ることができる。東側からの風が荒い時、海の潮が速い時などは、海女漁に出れないと認識。

海女の危険体験(4)

《 国崎Aさん 》

海女漁は、自分なりに泳いでいき、潮の流れが速い時は、おもりが利かないし、体力がいる。



大なり小なり、皆、怖い目をしている。



釣りをしに来ている人のテグス(釣り糸)に引っかかることが一番怖い。
岩場で、ナイロンのテグスに引っ掛かる。



釣り人が、後始末をせず、テグスが残る。特に息苦しくなるとテグスが分からず、その時、海女が引っ掛かる。



これは、潮の流れより怖い。

海女は、釣り人が来ている時には注意を喚起する。

海女の危険体験(5)

《 国崎Bさん 》

テグスは透明で、見えにくいし、釣り人の中には、海女の頭の上に餌を投げる人もいる。

《 国崎Cさん 》

テグスが一番怖いし、切れないので心配だ。海女漁の時は、ハサミも持っていないから不安に変わりが無い。

海女の危険体験(6)

《 相差Aさん 》

10年以上前、離れ島でヒモを巻いていたが、あがって来ない海女がいた。



アワビは、暗いところにおり、眺めている時に波が来て、危険な目をした。



自分の体が疲れている時は、浅いところしか潜らない。



皆が、自分で手加減している。



冬場は、心臓に負担がかかり、家族がとめる。

海女の危険体験(7)

《 相差Bさん 》

これまで相差では、7人の海女が亡くなった。心臓麻痺で亡くなった海女が3人、底引き網に引っ掛かって亡くなった海女が1人、岩場でヒモが引っ掛かって亡くなった海女が1人、それ以外おぼれて亡くなった海女が2人いる。



海の中では、タンポのヒモをはずす。岩場や海藻で引っ掛かることが現実にあるから。最初、息いっぱいでも、息が苦しくなってくれば、ヒモを引っ掛け、時間がかかる。ものすごく苦しくなり、夢中であらなければならぬ為、ヒモをはずしておくことが大事。



これまでヒモが2回、引っ掛かったことがあった。ヒモなしで体一つであれば、引っ掛からないし、海では死にたくない為、用心する。

海女の危険体験(8)

《 相差Cさん 》

去年、ナマコを獲る時、網がほってあった。



夢中になると、そちらに行き、知らずに行っていると、引っ掛かる。底引き網が危なく、磯のいたるところに、底引き網が放置されている。



深い場所や、潮の流れによって、網のある場所が分からない時がある。漁業組合の方から注意喚起をしてもらっている。



船に引かれそうになったこともある。



1人の時、船が上を通っていった。真上で船の音が聞こえたら怖く、船の方は気づいていなかった。船が通りすぎるまで待っていた。

海女の危険体験(9)

《 志島Aさん 》

危険な体験は、34歳の時、波が荒れてきて、急いで五人が船に乗った。男の人が一人、船頭であるトマイがおり、天候を見るのが上手であり、命が助かった。



これまで亡くなった海女は二人いる。



海女は、トマイに命を預けており、トマイがいるから安心だと。

鳥羽市答志町 7月中旬 小築海(こずくみ)さんの祭典

- ⇒ 答志島から北東方向に約2.6キロ離れた小築海島周辺の磯場で海女漁が解禁になる日の行事。
- ⇒ 小築海島での漁が始まる前には、八幡神社の宮司が祝詞をあげて大漁と安全を祈り、海にお神酒とお米を捧げる。
↓
- ⇒ 神事が終わると、海女らは一斉に海へ入り、2時間程の操業でアワビやサザエを採る。その間に、漁協の世話人ら男衆は小築海島に生えるカヤとクワを刈りに行く。
- ⇒ 操業を終えた海女は、アワビやサザエを手に八幡神社に供え、海の幸への感謝と安全を祈る。参拝を終えると、宮司からカヤとクワを受け取って持ち帰り、船や家の玄関に飾る。

出典 下村恵美『海女、海神に願う 志摩半島の海女祭 一祈り、魔除け一』海の博物館、2014年、3頁。

海女の信仰心(1)

《 答志Aさん 》

島の色々な行事があり、自然に手を合す。



沖へ出る時は必ず手を合す。



そして、海にお願いをする。



船に乗っている時は、海に先に食べ物を食べていただく。



海に先に食べ物を播くのは、人間を引っ張りにくるといけないから。

鳥羽市石鏡町 2月16日 八大龍神の前で 潜き下り(かずきおり)の祭典

- ⇒ 新しい年の海女漁が始まる前に、八大龍神に操業安全と大漁を祈る行事
- ⇒ この日、石鏡漁協には八大龍神の掛け軸がかかり、その前に一對のアワビが供えられる。海女は家から干し柿と米を升に入れ、丸餅と 酒、小石を持って龍神に供え、大漁を祈願する。

出典 下村恵美『海女、海神に願う 志摩半島の海女祭－祈り、魔除け－』海の博物館、2014年、14頁。

鳥羽市石鏡町 4月4日 八大龍神の前で 磯の下(お)り合わせの祭典

- ⇒ アワビ漁の解禁直前に、海女漁の大漁と操業安全を祈願する行事
- ⇒ 2月16日にある「潜き下り」とほとんど同じだが、異なるのは、お供えする品が丸餅ではなく、ぼたもち(おはぎ)に代わることと、地元の圓照寺で受けたお札を 髪の毛に結ぶことである。

出典 下村恵美『海女、海神に願う 志摩半島の海女祭
ー祈り、魔除けー』海の博物館、2014年、15頁。

鳥羽市石鏡町 7月10日 青峯山正福寺 中参宮(なかさぐ)の祭典

⇒海女漁の中休みとして、石鏡の海女全員が海上守護の霊峰として漁師たちから信仰が深い青峯山正福寺に参拝する。この時は、海女による演芸会が催される。

出典 下村恵美『海女、海神に願う 志摩半島の海女祭－祈り、魔除け－』海の博物館、2014年、27頁。

海女の信仰心(2)

《 石鏡Aさん 》

人間の心は、先祖さんあってこそその私だと。



何とはなしにご先祖さんが見守ってくれる。



今も、父さんが天から案じてくれている。



毎朝、仏さまには、御飯6つ、お茶、線香を立てる。御飯は毎日替える。



お供えは度々替え、毎日変わった物があれば、お供えをする。

海女の信仰心(3)

《 石鏡Aさん 》

石鏡では、青峯山に、海女さん全員が一年に一回はお参り。



年の初め、2月18日には、石鏡の海女さんが個々で青峯山へ行き、事故のないように、まめ息災でいさせてくださいという意味のお参りで、お願いしますという気持ちで拝む。



中参宮は、7月10日で、石鏡の海女さん、60人程が青峯山へ行き、中祝いで、アズキもちをあげる。海女さん皆で歌を歌い、楽しませてくださいという気持ちから参拝に行く。



年の終わり、12月25日以降には、石鏡の海女さんが個々で青峯山へ行き、1年間、無事にすごせ、有難うございましたという気持ちで拝む。

海女の信仰心(4)

《 石鏡Bさん 》

漁業組合の近くにある六地藏さんに、3日に1回は、拝みにいく。



お酒とお米のお供えをし、六地藏への祈祷は海女にとっては大切なものであると。

《 石鏡Cさん 》

石鏡から見ることのできる島の岩に穴があいており、朝日を拝んでいる。今日はどう、明日はどうかと考えない。

石鏡の六地藏さん



鳥羽市国崎町 1月17日 のっと正月の祭典

- ⇒ 正月の終わりの日とされる1月17日に家内安全や海上安全、豊漁などを祈願し、正月の神をわら船に乗せ、火を付けて海へ送り出す行事。
- ⇒ 各家では魔除けの言葉を記した「ツメの札」と洗米、赤飯、なます、お神酒、小銭を用意し、海女がそれらを持って前の浜に集まり、龍神に祈る。
- ⇒ 浜では町内会が用意したわらを使って、10人ほどの海女が長さ180センチ、幅100センチのわら舟を作る。わら舟には「歳徳丸」と書いたのぼりを立て、お神酒で浄めた後、波打ち際まで運んで火を付け、鈴の音を鳴らしながら海へ流す。

出典 下村恵美『海女、海神に願う 志摩半島の海女祭 — 祈り、魔除け —』海の博物館、2014年、21頁。

鳥羽市国崎町 7月1日

海土潜女(あまかづきめ)神社 例大祭の祭典

- ⇒ 二千年以上もの間、伊勢神宮にのしあわび献上を続けてきた先祖と豊かな資源を育む海へ感謝をささげる大祭。
- ⇒ 大祭には伊勢神宮から舞姫や雅楽が参列し、神楽を奉納する。
- ⇒ 例大祭当日は、海女漁は休み。国崎の海女は米と大豆、さい銭を持って神社に参拝する。

出典 下村恵美『海女、海神に願う 志摩半島の海女祭
—祈り、魔除け—』海の博物館、2014年、22頁。

海士潜女(あまかづきめ)神社



海女の信仰心(5)

《 国崎Aさん、国崎Bさん、国崎Cさん 》

海の神様へは、度々参る。

⇒国崎は、海士潜女(あまかつきめ)神社がある。

潜女神(かつきめのかみ)が祭られている。

《 国崎Aさん 》

2月には安全祈願祭があり、赤飯を炊き、お供えとして赤飯を供える。神社へ参った後、海へも参る。現役の海女さんや引退した海女さん全員を含め村中の参加がある。

鳥羽市相差町 5月7日 石神さん春まつりの祭典

- ⇒ 神明神社の参道にある「石神さん」は海女の信仰が厚く、女性の願い事を叶えてくれると言われ、全国から女性の参拝者が多く訪れている。
- ⇒ その石神さんで、海女の安息日である「磯日待ち」に大漁祈願と大願成就を祈願する。神事には白い磯着の海女が参列し、宮司のおはらいを受ける。
- ⇒ 神事の後にはこもり堂に移動し、男衆(おとこし)が日頃の労をねぎらい、手料理を振る舞って海女をもてなす。

出典 下村恵美『海女、海神に願う 志摩半島の海女祭
—祈り、魔除け—』海の博物館、2014年、24頁。

神明神社(石神さん)の正門



神明神社の本殿



神明神社に奉仕している海女さん



海女の信仰心(6)

《 相差Aさん 》

年に3回は、海と青峯山、神明神社(石神さん)へ個人でお参りに行く。浜にはお酒とアズキと米を持ってお参り。



石神さんへのお参りは50年前から続けている。

- ⇒ 1月25日は、潮干まちで、今年のはじまりで、安全に海女をさせていただきますと拝む。
- ⇒ 9月25日は、夏磯のお礼と、冬磯が無事にやっていけますようにと拝み、おはらいを受ける。
- ⇒ 12月25日は、冬磯(10月～12月27日)を無事にやってくる事ができて、有難うございましたという気持ちで拝む。



気持ちの問題で、お参りせんと気になる。

海女の信仰心(7)

《 相差Bさん 》

仏様へのお供えは、毎日、お茶と御飯を。



ご先祖さま見守ってください。大漁させてくださいとの想いをこめて拝む。



水中メガネのひもには、青峯山のお守りを手で括っている。



ウェットスーツには白で魔除けのドーマン、セーマンを入れている。

⇒ ドーマンの意味は、神様見守ってください。安心して海に行かせてくださいと。

⇒ セーマンの意味は、朝、海に行って無事に戻ってこれますようにと。

海女の信仰心(8)

《 相差Cさん 》

毎朝、仏様へお茶と御飯のお供え。



カマドのお地蔵さんに水をかけ、お菓子をそえる。



単車で行って潜る前にあるお地蔵さんのところでもお参りする。



毎回、無事に見守ってくださいとお参りし、お参りしないと気持ちが悪い。



理由が分かり納得することはするが、理由が分からず納得できないことはしない。

志摩市阿児町志島 3月18日 石経おらしの祭典

- ⇒ 小石に般若心経の文字を書いて海に沈め、海上安全などを祈る行事。
- ⇒ 海女が浜で拾い集めた小石に般若心経の文字、262字を一文字ずつ墨書した「石経」を西の浜へと持っていく。
- ⇒ 浜では海女が使う道具のひもや手ぬぐいの上に石経が置かれ、住職の読経に合わせて海女も手を合せる。
- ⇒ その後、海女が浜から海に向かい、海上安全と豊漁を祈って石経を投げる。

出典 下村恵美『海女、海神に願う 志摩半島の海女祭一祈り、魔除け一』海の博物館、2014年、35頁。

石経おらしで祈禱をする海蔵寺さんのお寺



海女の信仰心(9)

《 志島Aさん 》

実家のばあさんに、小さい頃、ご先祖さまのことはおろそかにするなと教えられた。



ご先祖さまのことをきちんとすれば、ご先祖さまは良いことを戻してくれると、小さい時に言い聞かされた。



毎朝、自分の御飯を食べる前に、仏さんにご飯とお茶をあげ、しきびを替える。



こうした習慣は受け継がれてきたもので、命日には心経をあげる。



海の仕事は危険性があるから信心は捨てない。

正月の風習(1)

《 答志Aさん 》

正月前には実家にお礼に行き、鏡餅2つを持って行く。



正月の4日間、船の慰霊の為、船を持っている家は、浜辺でみかんを播き、家でもミカンを播く。



⇒ 1月1日～1月4日は、神さま、仏さまへの祈願。



⇒ 1月21日は、正月のしめあげで、心経をあげる。もちをつくり、のりづけにする。神棚、床の間、部屋中に、しめ縄を巻く。

正月の風習(2)

《 石鏡Aさん 》

正月のお供え、浜、船、お地蔵さん、祠にもあげる。

⇒ 1月1日 アズキ御飯をあげる。

⇒ 1月2日 餅の上にアズキを盛り、それをあげる。



仏さまへは、半紙の上にお餅を二重ね2つあげ、お餅の上に細かいミカンを1つずつのせる。恵比須さまへは、半紙の上にお餅三重ね6つあげ、お餅の上に細かいミカンを1つずつのせる。浜へは、半紙の上にお餅一重ね2つあげ、お餅の上に細かいミカンを1つずつのせる。



正月1日、2日の船のお供えは、(イワシ一匹、お神酒、ナマス、赤飯、うでた伊勢エビ)一つの箱へ入れる。



正月の迎えは、家の玄関にツバキを右3つ左2つ飾る。玄関には、福の字の札を掲げ、札にはしめ縄を巻き、家の中、玄関、恵比須さま、仏さま、浜(三カ日)にも、しめ縄をする。

正月の風習(3)

《 国崎Aさん 》

31日の日に国崎の山の上にある祝いの葉を採りにいく。とくまめ、しいの木、ヒイラギ、松、サカキ、シダ、ウラジロ、コガネ草を採りに行き、葉にしめ縄をさし、代々家が続きますようにとの祈りが込められる。このしめ縄を家のあらゆるところにかける。納屋、風呂、床の間は一重ね、玄関は三重ねにする。玄関には札(蘇民将来子孫家門)をかける。札にもしめ縄をぶら下げる。正月、神さま、恵比須さま、仏さまへのお供えをする。お餅は赤と白で、それと共におせちを供える。半紙にはお米を供える。おせちの中味としては、伊勢ぜん、又は赤ぜんに、餅、サザエ、漁師の家はエビ、ミカン、串柿を供える。

正月の風習(4)

《 国崎Bさん 》

正月には神さま、仏さま、浜のお供えのため、赤飯を炊き、赤飯は銀紙に包む。



浜へは31日にぜんざいと、赤飯を供える。翌日には海へ流す。
1月1日、朝はぜんざいのお供え、夕方は、赤飯のお供えをする。
1日には味噌汁を炊き、2日には、供えたお供えをほり、その上に味噌汁をお供えする。

《 国崎Cさん 》

神社へのお供えのため、白米にアズキを混ぜたご飯を炊く。
31日の分、1日の分を炊き、1月1日はぜんざいも供える。
1月1日の浜へのお供えは、ぜんざいだけ。

正月の風習(5)

《 相違Bさん 》

⇒ 12月31日

浜の端へ、お供え(ナマス、アズキ御飯、米と大豆など)を個人個人が持って行く。



⇒ 1月2日

年を越すと膳(ニシメ、餅一重ね、エビ、お酒、サザエなど)を持って行く。船の持っている漁師は伊勢エビを捧げ、しめ縄をする。



正月のしめ縄、相違の家、どの家もしめ縄を飾る。(玄関、神棚、床の間、屋敷の神様、納屋などに。)

正月の風習(6)

《 志島Aさん 》

- ⇒ 1月1日 土地の神社である志島神社へ初詣に行く。
- ⇒ 1月2日 個人で海に行き、お酒と二段重ねのお餅のお供えをする。
- ⇒ 1月11日 朝、地元のお寺である海蔵寺で祈禱する→村中の人々が墓へ餅を持っていき、その後、海女個人、個人が浜へ餅を持っていく。



志島では、しめなわを作る人は10人程度。11月末から、しめなわ作りが始まる。玄関、床の間、仏壇、神棚、納屋、蔵、畑に1つずつしめ縄を巻く。太いしめなわは玄関に巻く。

お盆・お念仏の風習(1)

《 石鏡Aさん 石鏡Bさん 》

灯籠こわしは、今年でしまい。新盆の家は、毎年8～10軒程度で、8月16日の朝の6時には、5人年寄が、死んだ人の名前を呼ぶ。そして、海の方角に向かって念仏を申す。夕方の4時には、1軒に1人は灯籠を持って、一旦寺へ行き、寺から浜へ出る。5人年寄は、送りの際、太鼓をたたく役割があり、今年は、寺から浜へ、歌いながら、太鼓の打ち真似をして降りた。浜に太鼓を置いて、そこで太鼓を鳴らした。これまでは、はちまきをして、歩きながら太鼓をたたいていた。

お盆・お念仏の風習（2）

《 石鏡Bさん 》

念仏ばあさんのしきたりが無くなり、村の中で念仏をする風習が無くなった。お盆と御釈迦さんの日には、お寺で代理で雇われ、10年くらいが経つ。2月15日の御釈迦さんの日には、3人のばあさんと、お寺に念仏に行く。お寺の横に薬師さんがあり、薬師ばあさんがいた。薬師如来へのお念仏は、かつて1ヵ月のうち合計4回行われていた。この薬師如来は、大量祈願の神さまであるが、念仏の跡を継ぐ人がいない。

お盆・お念仏の風習(3)

《 国崎Aさん 》

国崎では、姑ができれば、中ばあさんになる。



60歳から70歳までは、大ばあさんで、従来は念仏ばあさんになった。現在、念仏ばあさんのメンバーは15人。



メンバーでは、63歳が一番若く、64歳は3人、60～62歳は入っていない。71歳以上は抜ける。3年前までは、1カ月に5回お堂で念仏の練習をした。今は強制ではなく、ここ2, 3年の傾向、消えゆく灯。

お盆・お念仏の風習(4)

《 国崎Aさん 》

⇒8月7日は、昔ながらの灯籠たきが寺と浜で行われる。一般の家では、灯籠を5つ作る。家の石碑の前で灯籠を焼き、念仏を唱える。



⇒8月13日には、施餓鬼会が行われ、お寺へ村中の人が行く。5色の施餓鬼の旗、各家が2本ずつ持ち、お寺へ持って行く。おっさんの心経を聞き、村中の人を持って帰る。



⇒8月16日には、沖へ行き、初盆の人が主の行事がある。墓の下に、1年間に死んだ人の数の竹の棒をさし、竹の棒に、半紙を細く折って、こよりをつける。多い年は9本か、10本。初盆の家の人、おつまみを供え、村の人が囲む。その後、村の人と共に防波堤のところに行き送り念仏。

お盆・お念仏の風習(5)

《 相差Bさん 》

念仏ばあさんは、63歳で入り73歳で降りる。お通夜の時、葬儀の時、49日の時、年忌の時、親戚の人らと一緒に参加する。今年の1月、63歳で入らない人もいた。今の64歳の方は全員入った。相差は1組平均30軒で、10組ある。組の中では、念仏ばあさんは6,7人、相差では60人以上いる。現在、迎え念仏、送り念仏は亡くなった家だけの行事。



昔は、地元どうしで結婚し、親の姿を見てきた。両親の習慣が自然に入った。今ではそれがない。現在は100%に近い確率で、よそから嫁に来ている。そのため、念仏の習慣を知らない。念仏を唱えるのは、こちらの気持ちであり、心を安らかな気持ちにさせる。73歳で念仏ばあさんを降りた人は、いつまでも念仏を覚えている。1回覚えた念仏は忘れない。80歳までは、親戚の念仏にいけば良いと考えている。

お盆・お念仏の風習(6)

《 志島Aさん 》

薬師さんは⇒ 毎月8日、12日に、お供えをして10人ほど（下は70歳から上は85歳までのメンバー）で、心経などお念仏を1時間ほど唱える。

大師さんは⇒ 毎月21日に、お供えをして心経などお念仏を1時間ほど唱える。この地域には、大きな井戸が2つあり、水が枯れず、この地域は飲み水で不自由しなかった。先祖代々、感謝の気持ちから。



薬師さん、大師さん、お念仏のある日は、村の中で、信心のある人が50人くらい、朝から昼までくらいに賽銭をあげに来る。

お盆・お念仏の風習(7)

《 志島Aさん 》

村中の家が、13日から15日まで施餓鬼棚を作り、精霊(ショウロ)さんを祭る。ただし、新仏の家は、12日から精霊(ショウロ)さんを祭る。昔は、施餓鬼棚を塩で洗った。



精霊(ショウロ)さんに祭る物

さつまいも、ほうずき、なす、なし、とうもろこし、カキ、

お盆・お念仏の風習(8)

《 志島Aさん 》

- ⇒13日～15日 村の人全員が、3カ日、小学校の校庭で踊る。
新盆の家が、盆踊りを主催
- ⇒14日 お寺(海蔵寺)で祈祷
- ⇒15日 村中が13日に精霊(ショウロ)さんを飾って、15日の2時に浜に精霊(ショウロ)さんを持っていく。また祭物も持っていく。1軒に1人は堤防に拝みにいく。200人くらいが参加する。たち火を燃やし、浜へ持っていく。



新仏(シンモン)さんが、火を炊く。新仏(シンモン)さんが穴を掘り、村中の精霊(ショウロ)さんを入れ燃やす。また、旗、しきび、つつも浜で燃やす。5時に和尚さんが送り念仏をして、和尚さんの後ろで新仏(シンモン)さんの家の代表が、供養を受ける。

まとめ

- ① 海女さんは自然と直面する仕事である為、日々の危険な体験の中から、それぞれの海女さんの信仰心が芽生えてきた。
- ② これまで継承されてきた共同体の祭典は、海女さんの日々の安全を祈る宗教観と密接に関わっており、特定の宗派が持つ教義というよりは、儀礼を重んじてきた。
- ③ 海女さんの宗教文化は、特定の宗派に捉われない 神仏習合の文化であり、神様も仏様も大切にしてきた。しかしながら、お念仏の継承に関しては、海女さんの減少にともない、消滅や縮小の傾向にある。

参考文献

石原義剛 2014 『海女、海神に願う 志摩半島の海女祭－祈り、魔除け－』 海の博物館、28頁。

阪野優 1980 『海女のいる村』 中部日本教育文化会。

野村史隆 1978 「国崎の年中行事」『海の博物館・年報』
財団法人東海水産科学協会。

安藤慶一郎 1980 『東海 ムラ的生活誌』 中日新聞社。

牧野由朗編 1994 『志摩の漁村 愛知大学総合郷土研究所
研究叢書9』 名著出版。

酒井美代 2011 『国崎の生活・郷土の迷信と方言の調』
国崎町内会。

山本茂紀・山本和子 2013 『海女の調査報告集』 太陽出版。